
間桐の最強の魔術師

幻龍星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

間桐の最強の魔術師

【Nコード】

N0379Z

【作者名】

幻龍星

【あらすじ】

Fate/zeroのifの物語です。これは作者の、処女作しかも駄文なので、嫌と言う人はバックをおすすめします

第0話（前書き）

こんにちは、幻龍星です。作者は厨二なのでよろしくおねがします

第0話

「知らない天井だ」

なぜ、こんなことになっているのかと一言で言えば転生しました、トラックに事故られ、変な神様がチート能力あげるから好きな世界に行つてと、言われ、赤ちゃんプレイかよー！と思つたら死ぬ前と同じからだでした
ちなみにチート能力はあとで説明するぜ

とりあえずどこだか、確認しようと思つたら移動したら。

「ようやく起きたか、氷夜いつまで寝てるつもりじゃ」

えー！えー！まさかの臓硯なんで、まさかここ、間桐の家！！！
俺が甲子園の決勝でサヨナラホームランを打たれたピッチャーのよ
うな格好をしていたら。

「なにをしている氷夜、聖杯戦争のための修行の旅の支度はできて
いるんか、貴様は雁夜と違って家を次ぐのじゃぞ」

俺がなんで間桐の家をつがなくちゃならないんだよ、いやまてよち
よつと聞いてみるか。

「なあ、臓硯おれは何者なんだ」

つと聞いてみたほかの人から見たらなにこいつ、頭がついにいかれ
たのかと思うがこれは大事だ。何故なら俺が誰なのかがわかるだ。

「なにを、言っているのだ氷夜、貴様はわしの息子で、雁夜の弟じ
やぞ」

第0話（後書き）

臓硯の口調が分からない、いやまじで。次はキャラ説明です

主人公説明（前書き）

タイトルのとおりです。

主人公説明

名前 間桐 氷夜 ひよこや

性別 男 年齢 16

身長 180センチ

性格 結構マイペースであり、初対面でも好かれやすい性格、しかし戦闘時は、性格が反対になり冷徹無比な性格で自分以外には容赦がなく、殺すときも容赦がない、寧ろ楽しんでる様な感じ。しかし、一度、焦ると止まらない。ある人物だけには、戦闘時も変わらない。

特技 料理 口説くこと

容姿 ぶつちやけ言つとイケメン、細かく言うなら、いつか天魔の黒兔の紅 日向の片めがねとったバージョン。

チート能力 エンカウンター めだかボックスの異常、マイナスの能力 好んで使うのは不慮の事故

前世は交通事故でなくなり神様に頼んでこの世界に来た、モテモテで女遊びが激しい、原作の女性キャラもほとんど、喰われている。

氷夜は養子で間桐の家に来ている、氷夜が間桐の養子であることを知
っているのは臓硯のみで雁夜やほかの人たちは知らない

主人公説明（後書き）

自分は不定期で更新するのによろしく。

第1話（前書き）

すみません、前書きだるくなっ
たんで次からかけるかどうか

第1話

あれから六年した、いろいろあつたりしたが結構楽しい日々だった、夜の出来事でも、旅をしている途中、衛宮の相棒、久宇舞弥に出会って一緒に出かけたりしたが。

あれこの人こんなキャラだっけと言うのが何回もあった、しかもなぜか惚れられてしまった、まあ俺的にはいいんだがな、しかも夜も、

「ああ／＼／」

なんて声を出すから興奮しちまったぜ、終わって、別れる時も

「次会ったら、またしてくれ／＼」

なんて言うからさ困ったぜ、まったくモテル男は辛いぜ。

しかし今はそんなこと言ってられない、もうすぐ聖杯戦争が始まるのだから、もう令呪ある触媒手にいれた。

そういえば、この前遠坂の次女が家に来た、まあしょうがないけどね、俺のことを間桐と知っているのは。臓硯だけほかは、ただの、

臓権の何かしか思っていない、桜が来るのは必然さ、兄さんも臓権に、刻印蟲をうえつけられていた、因み兄さんは修行中だ。

しかし、俺はイレギュラーな存在だが大丈夫なのか、原作の人物はしっかりと聖杯に出られるのだろうか、まあ俺の知ったことではないがな、

そうそう、俺の手に入れた聖遺物なのだがどうやら、誰の触媒なのか分からないらしい、しかしそれも、おもしろい、スリルがあつてまあいっざつて時は俺の異常で勝ち抜くか。

ついでに、女も喰わせてもらおう。

「氷夜よ、そろそろ、サーバントの準備を始めろぞ」

俺が考え事をしていたら臓硯が言ってきた

「ああ」

さてと、聖遺物も置いたしそろそろ詠唱をするかね。

「閉じよ（満たせ）、閉じよ（満たせ）、閉じよ、（満たせ）閉じよ（満たせ）閉じよ（満たせ）繰り返すつどに五度、ただ、満たされる刻を破却するー」

詠唱をしている時にふと思った。もしも原作の英霊を呼んでしまったらどうしよう、アルトリアをよんでしまったらどうしよう。

「……告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよー」

だんだんと、魔方阵が光だし、それに対して興奮や期待がこみ上げてきた、しかし、不安もそれに伴いこみ上げてきた、自分は最強のサヴァーントを呼び出すことができるのだろうか？

いや、呼び出してみせる、そしてこの呪われた聖杯を、破壊しなければと言う思いがだんだんと膨らんできた。

「ー誓いを此処に……我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者ー」

そして、呪文の詠唱が終わりに近づくと、それに対するかのように魔力も循環してきた。

「ー汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれツ、天秤の守

り手よ！！――」

最後の詠唱が終わり、魔方陣の中央で魔力があふれ出して来た、暴風のような風が巻き起こされ、陣の内が外界と繋がった。

英霊と呼ばれるサーヴァント、が姿を現そうとしていた、俺はいつたい何の、クラスのサーヴァント、を呼び出したのか気になってしまふ。

そして、ようやくサーヴァントの姿が現された。

「――問おう貴方が私のマスターか？」

何！？、この綺麗な声に髪は金髪、容姿は男性にでも女性にでも見えるであろう。

「そつだ」

俺は思わず返事をしてしまった。

「サーヴァント、セイバー此処に召還に応じて、参上した」

やっぱり、セイバーだあああ――

第1話（後書き）

まさかの、セイバーです、キラッグのほうどうじよう。

第2話（前書き）

もうお気に入り、50件突破しましたうれしすぎです、

しかし、もしかしたらこの小説消すかも、リアル友達に、「この二次元小説はないわー」と、言われたので

第2話

「おい、臓硯、聖遺物がアーサー王のだとは聞いていないぞ、どう言うことだ、答える臓硯!!」

どうも、間桐 氷夜です、ちなみに今、臓硯と話しています、セイバーは俺が作った料理を別室で食べています、なぜ。セイバーなのか、いや本当に原作早速ぶっ壊しちゃったよ、いやたしかに、原作壊したいなーと思ってたけど、そんな急に、壊したりしたくなかった、これじゃあまるで、どっかの小説の。

「その幻想ぶっ壊す」

見たいじゃないか、上〇さん見たいにしないでいいよ。

「ふん、何を言うかと思えばそれが、最強のサーヴァントの聖遺物を持ってきてくれと、言ったのは、お前ではないか、氷夜よ」

そつだ、確かに最強のサーヴァントの聖遺物を持ってきてくれといつたが、アーサー王のじゃなくてもいいだろ。

うん？、まてよ、確か兄さんの聖遺物は、サー・ランスロットのだったはず、いや、まてまてもしかしたら違つかも知れないぞ。

「おい、臆硯、兄さんの聖遺物は、ランスロットのか？」

「よく分かつたの氷夜、確かに、雁夜の聖遺物は、裏切りの騎士ごと、サー・ランスロットのじゃ」

ふん、そうか、見たいにクールに決めているのかと思うがマジで焦っている。

だつて、あのランスロットだよ、円卓の騎士のセイバーの部下の！、しかも、裏切ってるからねあの入、原作でも狂化したランスロットが、セイバーと戦っているからね、この世界でもそんなことあったら、身内、どうして殺しあつんだよ。

「氷夜、食事がなくなったので早く作ってください」

此処にきてまさかの、腹ペコ騎士王光臨か、俺は焦っていると言つのに、セイバーはマイペースだな、まったく、少し待ってもらおう。

「少しまってくれ、セイバー今は、話ごとをしているんだ」

これで良いだろ、騎士ならば待つてくれるはずと思っていたおれがバカだった。

「わかりました、では、少しだけ！待ちます」

少しを、強調してきたか、はあー、しゃあない、食事を作りますかと、思い動き出した、俺だが一回臍権の方を向き、こう言った

「おい臍硯、良いか？次なめたこととしてみるよ、殺すぞ」

と言い、スカーデッド致死武器を発動してセイバーの方に行った

食事を作りセイバーの所に行った俺、セイバーは、遅いですよ、見たいな感じをだしながら笑顔で食事を食べていく。

「こっつて見ると騎士じゃなくて普通の可愛い女の子だな」

と、呟いたのだが、セイバーは聞こえたらしく。

「な／＼、何を言っているのです、氷夜／＼」

つと、顔を真っ赤にして慌てて答えた、しかし俺はそんなこは構わず。

「本当のことだよ、セイバー、いつもの君も可愛いけど、笑顔でいる君はもっと可愛いな」

見たいな事を言ったら、俺も微笑ん頭をなでながら、言ったらセイバーが

「き／＼騎士に可愛いなど言うのは止めてください、私はこの剣を抜いた時から女でわなく男で生きていくと誓ったのです！」

剣を見せ、顔を赤くしながら言っても、俺にはただの可愛い女の子にしか見えなかった。そして、そんなことを言う、セイバーに畳み掛ける様に言った

「分かったよ、でも、ほかの人には騎士見たいな感じで良いけど、俺の前では、普通の可愛い女の子でいてね」

っと、言ったらセイバーは、爆発寸前見たいに顔を赤くし、

「わ／＼分かりました、それが、氷夜の命令と言うならば／＼」

なんて、感じて食事を俺たちは続けたのであった。

第2話（後書き）

いやーセイバーキャラ崩壊してるよ、氷夜も、設定を変えなければ

第3話（前書き）

ノクターンで書いてくれと言っのが何件かきてましたが、気が向いたら書きます。

あとがきに重要なこと書いてあるんで見てください

第3話

あの後、一度セイバーと話し合い、セイバーの宝具である、約束された勝利の剣の鞘である、全て遠き理想郷アヴァロンが無いことが判明した。
エクスカリバー

まあ、切嗣がセイバーを呼び出すために使う触媒だからね多分、アインツベルの城にあると思うけどね。

「セイバー、俺今からちょっと出掛けるから、留守を頼む」

因み、個々は間桐の家ではない、俺が買った一軒家である。

だれが、好き好んであんな屋敷に住むか、普通に不気味だわあの家。

「ならば、私も行きます、私は氷夜のサーヴァントですから」

何と礼儀正しい、何処かの、英雄王に聞かしてやりたいわ。

しかし、今は別マスターにセイバーの存在を誰かに知られるわけにはいかない。

「大丈夫だって、お前のマスターをしんじろ」

「分かりました、では私は留守番をしっかりとしてみせます」

良い返事だ、最後らへんはちょっと子供扱いけど、作者は文才がないから、許してくれ

僕は今驚いている、なんせ呼び出した、サーヴァントが平行世界パラレルワールドのアーサー王なのだから

「貴方は、本当にこの世界のアーサー王ではないのね？」

とアイリが尋ねている。

「はい、私はこの世界のアーサー王ではありません、聖剣の鞘である、全て遠き幻想郷アサアロンもありましたし」

確かに、そうだ僕は、アーサー王を召喚するために聖剣の鞘を、触媒に使ったのだから。

それに、驚いたことは、もう一つある、舞弥が最近変なのである、前も。

回想

「舞弥ちよつといいか？」

「.....」

「舞弥？」

「は、はい何でしょうか、切嗣？」

「いや、なんかいつもと、様子を変だが」

「大丈夫です、切嗣問題ありません」

「いや、大丈夫に見えないん、だが？」

「.....」

回想終了

と数年前からこんな、感じである前までは、僕と肉体関係をもっていたのだが今ではもってない、アイリいわく。

30

「きつと舞弥さんは恋しているのよ、顔だっつて恋する乙女見たいじゃない」

と言っていた、まあ舞弥には良いと思うのだけど、一体誰に恋しているのか気になる？

氷夜サイド

「ハックション！」

全く誰か噂をしているなまあそんなことは気にしないで、今は鞄がどこにあるのか探そう。

因みに、今何をしているのかと言えば、アリバイブロック 贓罪証明で此処来て、知られざる英雄ミスターアンノウンを使って鞄を探している

今の格好はスークの服装に某漫画の死神主人公の仮面を付けている、知らない人が見れば一発で不審者扱いされる

「お、あつたあつたようやく見つけたぜ」

ようやく鞄が見つかり早く帰るとしたその時

「何物だ！」

見つかりました知られざる英雄ミスターアンノウンを発動しているのにも関わらず。

「どうして俺がいると分かったのだ？ 気配は消したはずだが!？」

「私の直感のスキルを嘗めないで戴きたい」

そういうことか、しかし直感と言っていたな

「おいお前サーヴァントか？」

と言い相手の方に体を向けた。

俺は驚いた何故ならセイバーと瓜二つだったからだ

「そつだと言ったらどうする?」

と多分サーヴァントらしき人が答えた。

しかし今はそんなことどうでもいい、アルトリアではないなぜなら、俺の前にいるやつが男だから。

だが俺は直ぐにやつの正体が分かった、受信感度を使い相手思考を
読んだ。

「パラルワールドなるほど平行世界のアーサー王か、だが此処は帰らせてもらっ
よ（さらばだ、平行世界のアーサー王よ」

とアリバイブロッケ言い臍罪証明で家に帰った。

サイドアーサー王

一体やつは何物だ、私の正体は知っているし、瞬時に消える取り合
えず切嗣に報告しなければ

氷夜サイド

「ほらアルトリアお前の聖剣の鞘だ取ってきてやったぞ」

家に戻った俺はアルトリアに鞘を渡した

「ありがとうございます、しかし氷夜一体何処あったのですか？」

「まあ気にするなそろそろ食事にするぞ」

話しをはぐらして食事にしようと言う俺、食事ならばセイバーは絶対に食いつくはず。

「話しを反らしも無駄です、一体この鞘は何処あったのですか!？」

な、何いいい〜セイバーがスルーするだと、予想外だ本当のことを話すか

話し中

「そうですねかつまり本当ならば私はそのアインツベルのところに召喚させられてたと」

「はい」

「貴方はこの鞘を略奪して来たと？」

「その通りです」

ただ今絶賛説教され中でセイバーに

「人の物を勝手に奪うとは騎士としては許せません」

「承知しております、申し訳ありません」

この後も、説教を受けるのであった。

第3話（後書き）

今思ったんだけどやっぱりFate/zeroでハーレム無理だと思っので。アンケートとります

アンケート

1このまま続ける

2ちょっと止めるよ

3作者の勝手にしろ

以上しめきりは明日の15時まで

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0379z/>

間桐の最強の魔術師

2011年12月3日15時59分発行